松本市文化財調査報告 №252

長野県松本市

HONGŌTAKADA

本郷高田遺跡

YANAGIDA

柳田遺跡 3

－発掘調査報告書－

2024.9

松本市教育委員会

例 言

1 本書は、平成６年５月16日～６月13日に実施した松本市浅間温泉二丁目９番２号ほかに所在する本郷高田遺跡と、平成10年６月４日～10月９日に実施した同浅間温泉一丁目214番１ほかに所在する柳田遺跡の発掘調査報告書である。

2 本郷高田遺跡の発掘調査は松本市のばら保育園・浅間児童センターの移転改築事業に伴う緊急発掘で、松本市から委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団が実施した。柳田遺跡の発掘調査は松本市消防団第23分団詰所建設事業に伴う緊急発掘で、松本市教育委員会が実施した。両発掘調査の整理作業・報告書作成は松本市教育委員会が令和６年度に実施した。

3 本書の執筆分担は次のとおり。Ⅰ：事務局、Ⅲ－３(2)：原田健司、その他：直井雅尚

4 本書の作成にあたっての作業分担は次のとおり。

遺物洗浄・注記・接合・復元：内沢紀代子、内田和子、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、三澤栄子

遺物実測・拓本・デジタルトレース：佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、直井知導、原田健司、前沢里江、宮本章江

遺構図調整・デジタルトレース：荒井留美子　ＤＴＰ：前沢里江　編集：直井雅尚

その他、高山いず美、廣田早和子、壬生量子の助力を得た。

5 本文、図・表中での遺構略称は次のとおり。竪穴建物：住、掘立柱建物：建、土坑：土、ピット：Ｐ、ロームマウンド：ＬＭ

6 土器類実測図の断面表現は次のとおり。白抜き：縄文土器・土師器・黒色土器、黒塗り：須恵器、灰色：繊維含む土器

7 図中で用いた方位記号は座標北（世界測地系）を指している。

8 発掘調査と本書作成にあたって次の方々からご教示、ご指導をいただいた。記して感謝を申し上げる。

桐原 健、小松 学、島田哲男、鳥羽英継、原 明芳、宮本長二郎、百瀬長秀

9 本書で用いた古代の遺構・土器の時期区分、用語は参考文献２・３に拠った。

10 本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 ℡0263-86-4710）に収蔵されている。

【参考文献】

文献１ 原明芳 1989「吉田川西遺跡にみられる食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２－吉田川西遺跡』長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター

文献２ 小平和夫 1990「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－総論編』長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター

文献３ 鳥羽英継 1999「第５章第１節 土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26－更埴市内その５－更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）－古代１編－』長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター

文献４ 松本市教育委員会 1979『松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査報告書』

文献５ 松本市教育委員会 1988『松本市文化財調査報告№66 松本市杵坂遺跡・本郷小学校敷地遺跡』

文献６ 松本市教育委員会 1989『大村遺跡 古瓦を出土する平安時代集落址の発掘調査概報』

文献７ 松本市教育委員会 1989『松本市文化財調査報告№69 松本市千鹿頭北遺跡』

文献８ 松本市教育委員会 1991『小池遺跡－平安時代集落址の発掘調査－』

文献９ 松本市教育委員会 1992『松本市文化財調査報告№94 松本市宮の前遺跡』

文献10 松本市教育委員会 2017『松本市文化財調査報告№226 三間沢川左岸遺跡』

文献11 長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書７－松本市内その４－南栗遺跡』

文献12 長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書８－松本市内その５－北栗遺跡』

目 次

例言・目次 …… 2

Ⅰ 調査の経緯 …… 3

Ⅱ 遺跡の環境 …… 5

Ⅲ 本郷高田遺跡の調査

１ 調査の概要 ……7　２ 発見された遺構 ……7　３ 出土遺物 ……14

Ⅳ 柳田遺跡の調査

１ 調査の概要 …… 21　２ 発見された遺構と遺物 …… 21

Ⅴ 総括 …… 25

写真図版 …… 26　報告書抄録 …… 32

Ⅰ　調査の経緯

1 調査の経過

本郷高田遺跡　松本市（当時の担当は児童福祉課）により、松本市浅間温泉二丁目９番２号において松本市立のばら保育園・浅間児童センターの移転改築事業が計画されたが、予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地本郷高田遺跡の範囲内にあった。松本市教育委員会（当時の担当は文化課）は遺跡が破壊される部分の記録保存を図ることとし、松本市から委託を受けた㈱松本市教育文化振興財団（担当は考古博物館）が平成６年５月16日から６月13日の間、発掘調査を実施した。調査終了後の６月17日に市教委は埋蔵文化財拾得届と同保管証を松本警察署に提出し、６月28日付で長野県教育委員会から埋蔵物の文化財認定をうけた。

柳田遺跡　松本市（担当は消防防災課）により、松本市浅間温泉一丁目214番１地籍において松本市消防団詰所の建設が計画されたが、予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地柳田遺跡の範囲にかかる可能性があった。松本市教育委員会（担当は文化課）が試掘調査を行ったところ遺構の存在が確認されたため、引き続き発掘調査に移行し記録保存を図った。試掘調査も含めた調査期間は平成10年６月４日から同年10月９日までである。調査終了後に市教委は埋蔵文化財拾得届と同保管証を松本警察署に提出し、11月５日付で長野県教育委員会から埋蔵物の文化財認定をうけた。また、発見された掘立柱建物等の遺構について発掘期間中の６月16日に桐原健氏（松本市文化財審議委員）、７月17日に宮本長二郎氏（東京国立文化財研究所）の現地指導を得た。

整理作業・報告書刊行　両発掘ともに現場作業に引き続き出土品や測量図等の基礎的な整理作業を実施したが、正式な発掘調査報告書の刊行には至らず、令和６年度に出土品等の再整理を行い本書を刊行した。

2 調査体制

本郷高田遺跡（平成６年度）

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）　**調査担当** 竹内靖長（主事）、村田昇司（嘱託）

発掘協力者　飯田三男、岡村行夫、河上純一、小松正子、斎藤政雄、鶴川 登、寺島貞友、中島新嗣、中村惠子、藤井源吾、藤井マツエ、藤井道明、深井美登利、布山 洋、増沢 治、三沢元太郎、百瀬二三子、吉田 勝

事務局 文化課：岩渕世紀（課長）、木下雅文（文化係長）、窪田雅之（主任）、遠藤 守（主事）

松本市教育文化振興財団：大池 光（事務局長）、熊谷康治（考古博物館長）、松澤憲一（主査）、関沢 聡（主任）、久保田剛（主事）、秋山圭子（嘱託）

柳田遺跡第３次（平成10年度）

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）　**調査担当** 田多井用章（主事）

発掘協力者 岡村行夫、久保田登子、田中一雄、藤井道明

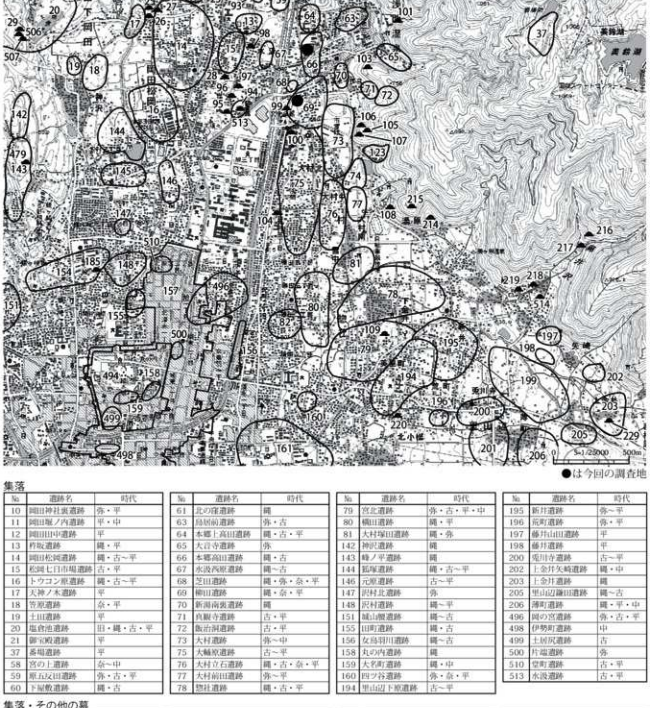
事務局 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、近藤 潔（主事）、久保田剛（同）、上條まゆみ（嘱託）

整理作業・報告書作成（令和６年度）

整理担当 原田健司（主査）、直井雅尚（会計年度任用職員）

整理協力者 荒井留美子、内田和子、久保田瑞恵、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、直井知導、中澤温子、洞沢文江、前沢里江、三澤栄子、村山牧枝

事務局 田多井用章（文化財課長）、櫻井 了（埋蔵文化財担当係長）、原田健司、吉見寿美恵（会計年度任用職員）



●は今回の調査地

集落

№	遺跡名	時代
10	岡田神社貝遺跡	弥・平
11	岡田堀ノ内遺跡	平・中
12	岡田田中遺跡	平・中
13	粉敷遺跡	縄・平
14	岡田松岡遺跡	縄・古～平
15	松岡七日市場遺跡	古・平
16	トウコエ原遺跡	縄・古～平
17	天神ノ木遺跡	平
18	笥原遺跡	奈・平
19	土田遺跡	平
20	塩沢池遺跡	旧・縄・古・平
21	御宝殿遺跡	平
37	長場遺跡	平
58	笠白上遺跡	弥～中
59	原五反田遺跡	弥・古・平
60	下原敷遺跡	縄・古
61	北の宮遺跡	縄
63	島田前遺跡	弥・古
64	本郷上高田遺跡	縄・古・平
65	大音寺遺跡	弥
66	本郷高田遺跡	縄・古
67	水流西原遺跡	縄～古
68	笠田遺跡	縄・弥・奈・平
69	柳田遺跡	縄・奈・平
70	新湖南裏遺跡	縄
71	真観寺遺跡	古・平
72	飯沼屋遺跡	古・平
73	大村遺跡	弥～中
75	大輪欽遺跡	古～平
76	大村立石遺跡	縄・古・奈・平
77	大村前田遺跡	弥～平
78	惣社遺跡	縄・古・平
79	宮北遺跡	弥・古・平・中
80	横山遺跡	縄・平
81	大村塚田遺跡	縄・弥
142	神沢遺跡	縄
143	蟬ノ平遺跡	縄
144	鶴塚遺跡	縄・古～平
146	元郷遺跡	古～平
147	沢村北遺跡	弥
148	沢村遺跡	縄～平
151	城山腰遺跡	縄～古
155	田町遺跡	縄・古
156	女鳥羽川遺跡	縄～古
158	丸の内遺跡	縄
159	大手町遺跡	縄・中
160	四ツ谷遺跡	弥・奈・平
194	里山辺上原遺跡	古～平
195	新井遺跡	弥～平
196	荒町遺跡	弥・平
197	藤井山田遺跡	平
198	藤井遺跡	平
200	鬼川寺遺跡	古～平
202	上金井矢崎遺跡	縄・中
203	上金井遺跡	縄
205	里山辺蟹田遺跡	縄～古
206	薄町遺跡	縄・平・中
496	岡の宮遺跡	弥・古・平
498	伊勢町遺跡	中
499	土居尻遺跡	古
500	片端遺跡	弥
510	堂町遺跡	古・平
513	水洗遺跡	古・平

集落・その他の墓

№	遺跡名	時代
74	大村古屋敷遺跡	弥～中
82	横山古屋敷遺跡	弥・古・平
145	旧制的場西遺跡	縄・古～中
154	鶴ケ崎遺跡	奈・平
161	照町遺跡	弥～中
199	堀の内遺跡	縄～中
201	針塚遺跡	縄・弥・奈～中

古墳

№	遺跡名
23	岡田塚塚古墳
25	矢崎１号古墳
26	矢崎２号古墳
27	矢崎３号古墳
28	松岡古墳
29	塚山１号古墳
90	笠白山古墳
92	原下屋敷古墳
93	塚畑古墳
94	水流１号古墳
95	水流２号古墳
96	水流３号古墳
97	水流４号古墳
98	水流５号古墳
99	大堀敷１号古墳
100	大堀敷２号古墳
101	横浜入古墳
102	御殿山古墳
103	桜ケ丘古墳
105	妙義山１号古墳
106	妙義山２号古墳
107	妙義山３号古墳
108	梅仙岡古墳
109	惣社車塚古墳
185	鶴浦塚古墳
214	御母家１号（里山辺５号）古墳
215	御母家２号古墳
216	山田古墳
217	里山辺丸山古墳
218	藤井１号（里山辺８号）古墳
219	藤井２号（里山辺15号）古墳
220	荒町（里山辺１号）古墳
229	上金井（里山辺12号）古墳
479	峰ノ平１号古墳
506	塚山２号古墳
507	塚山３号古墳
514	藤井３号古墳

近世

№	遺跡名	種別	時代
157	松本城下町跡	町屋・武家地・寺社	中・近
494	松本城跡	城跡	中・近

窯跡

№	遺跡名	種別	時代
123	大村新明古窯址	窯跡	古

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

Ⅱ　遺跡の環境

1　地理的環境

本郷高田遺跡と柳田遺跡は、松本市街の東方を北から南へ一直線に流下する女鳥羽川下流域の左岸沿いに北から南に並ぶように位置する。本郷高田遺跡は浅間温泉二丁目から一丁目にかけて南北 360 m、東西 160 mの範囲に広がる。柳田遺跡はその南界に接し浅間温泉一丁目を中心に南北 420 m、東西 310 mの範囲に及ぶ。今回報告の調査地点は、前者が遺跡中央部北寄りに位置し海抜 653 m、後者は遺跡西端部北寄りで海抜 642 m付近になる。両遺跡が展開する一帯は、北の浅間温泉から南の横田地籍まで続く女鳥羽川左岸の南北に延びる微高地で、南に向かって緩傾する。微高地の西端には北から本郷上高田・本郷高田・芝田・柳田・大輔原の 5 遺跡が約 2㎞にわたって連なり、海抜は最も高い本郷上高田遺跡北部で 660 m、最も低い大輔原遺跡南部で 613 mを測る。浅間温泉や東方の山地に発する小河川はすべてこの微高地を東西に横断することなく南へ流下し、横田、惣社地籍に至って西流する湯川に合する。この微高地の東側には山麓地帯との間に狭い範囲ではあるが北から南、南東へと延びる水はけの悪い低地があったが、現在はほ場整備や宅地造成などによって不明瞭になっている。また、微高地の西側を南流する女鳥羽川は現在は南北一直線のきわめて不自然な流路をとっており、大輔原遺跡より下流では河道下から縄文、弥生、古墳の各時代の遺構や遺物が発見されている。これらはその当時、河道が現在地になかったことを示すもので、現河道はおそらく中世末から近世初期にかけて大規模な人為的改変が行われた結果と考えられる。それ以前の主要流路は柳田遺跡や大輔原遺跡付近から南南西に向かっていた可能性を想定したい。原始、古代にあっては一帯の状況は現在とはかなり異なっていたと考えるべきであろう。

2　歴史的環境

(1) 遺跡分布と歴史的な特徴

両遺跡が載る前述の微高地上には多くの遺跡（第 1 図 64・66・69・73 ～ 77・80 ～ 82 等）が展開し「浅間・大村・横田微高地遺跡群」ともいうべき在り方をみせる。遺跡の時期は縄文時代から中世まで多岐にわたり、各時代に居住適地として利用されたことがわかる。また、東方の山上、山麓には桜ヶ丘古墳、妙義山古墳群、桃仙園古墳など中期に遡る古墳が築かれており、一帯の開発の古さと政治的な重心の存在を物語る。さらに、古代の文献に残る駅名から令制東山道の通過地域と推定され、大村や浅間温泉、南隣の惣社地籍は国府推定地に挙げられる等、信濃（科野）の古代史を探るうえできわめて重要な地域である。

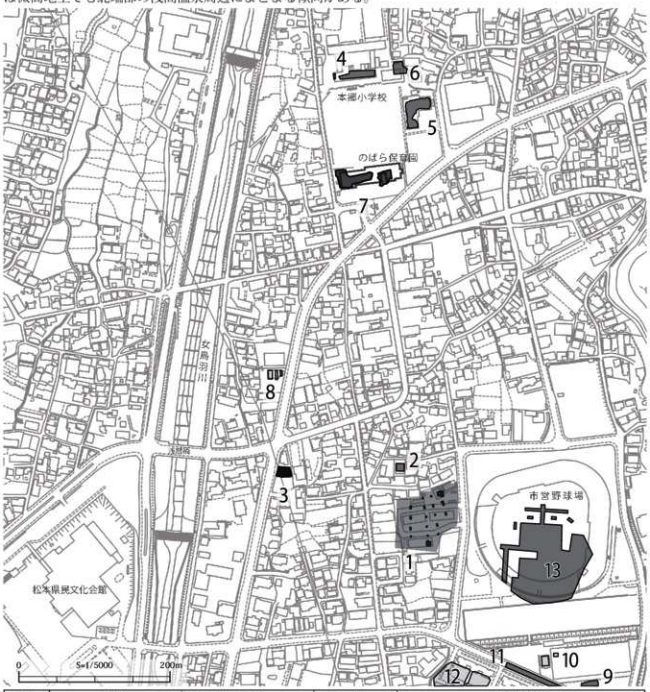
(2) 周辺の発掘調査成果

今回の報告に関わる古墳時代から奈良・平安時代に絞って、周辺でのこれまでの発掘調査成果をみてみたい（カッコ内の数字は第 1 図の遺跡番号を示す）。

古墳時代は、本郷高田遺跡（66）、大村遺跡（73）、大村古屋敷遺跡（74）、大輔原遺跡（75）などで中・後期の竪穴建物が発見されている。中期は大村古屋敷遺跡の 7 棟のみだが、後期には本郷高田遺跡 2 棟（今回報告）、大村遺跡 7 棟、大村古屋敷遺跡 8 棟、大輔原遺跡 3 棟があり、後期になって集落が微高地上で大きく展開した様子がわかる。微高地東方の山上に築かれた桜ヶ丘古墳（103）、妙義山 2 号古墳（106）は昭和 30・31 年の発掘調査で竪穴系の埋葬主体を持つ、中期に遡る古墳と判明した。前者からは金銅製天冠、衝角付冑、長方板革綴短甲、刀剣類 6、多数の鏃と玉類、後者からも刀 3、鏃 70 余、馬具、玉類や耳環などの装身具多数が発見された。5 世紀後半から 6 世紀における地域の首長墓級の古墳と推定されている。

奈良・平安時代になると、柳田遺跡（69）、大村遺跡（73）、大村古屋敷遺跡（74）、大輔原遺跡（75）、大村前田遺跡（77）、宮北遺跡（79）など多くの遺跡から多数の竪穴建物が発見されている。既報告に限っても大村遺跡 19 棟、大輔原遺跡 28 棟、大村古屋敷遺跡 27 棟、大村前田遺跡 3 棟などで、ほかに未報告

が 70 棟以上あり、この一帯に大きな集落がいくつも形成されていたことがわかる。さらに大村古屋敷遺跡の緑釉陶器を副葬した墓、大村遺跡での多数の緑釉陶器と鴟尾を伴う大量の古瓦、大輔原遺跡と大村遺跡での複数の円面硯と銅鈴、大村古屋敷遺跡の銅製八稜鏡など特殊な遺構・遺物の発見が相次いでいる。これらは微高地上でも北端部の浅間温泉周辺にまとまる傾向がある。



地点	調査名	原因事業	調査年	調査成果概略
1	柳田遺跡 1 次	県営住宅	1979(S54)	住 3、集石 2（縄文中期）、縄文晩期土器
2	柳田遺跡 2 次	民間アパート	1990(H2)	住 1（古代）、建 2
3	柳田遺跡 3 次	消防詰所	1998(H10)	建 1
4	本郷上高田遺跡 1 次	本郷小学校	1987(S62)	溝、流路
5	本郷上高田遺跡 2 次	本郷支所	1993(H5)	住 5（縄文、古代）、土坑
6	本郷上高田遺跡 3 次	本郷小学校プール	1996(H8)	遺構なし
7	本郷高田遺跡 1 次	のばら保育園	1994(H6)	住 3・建 1（古墳末）、土坑（縄文前期）
8	芝田遺跡 1 次	民間店舗	2013(H25)	縄文晩期遺物
9	大村遺跡 1 次	テニスコート	1986(S61)	住 1、建 1
10	大村遺跡 2 次	クラブハウス	1987(S62)	住 2（古代）
11	大村遺跡 3 次	市住・市道	1988(S63)	住 23（古代）
12	大村遺跡 4 次	市住	1989(H1)	住 60（古代）
13	大村遺跡 5 次	野球場	1989(H1)	住 2（古代）

第 2 図　調査地と周辺調査地点

Ⅲ　本郷高田遺跡の調査

1　調査の概要

調査地　保育園の建設工事で遺跡が破壊される範囲を対象としたが、諸般の制約があり調査地は西側 2/3 の A 区と残りの東側部分の B 区の 2 地区に分かれた。調査面積は A 区 637.3㎡、B 区 251.9㎡、合計 889.2㎡である（第３図）。

調査　パワーショベルで表土を除去、遺構検出面付近まで削り込んだ後、人力で遺構検出を行い、確認できた順に遺構番号を付して掘り下げた。出土遺物の取り上げは掘り下げ区画ごとの一括を基本とし、出土状況が良好なものは地点を記録した。遺構測量は簡易遣り方により 1/20 縮尺の平面図と土層図を作成、写真撮影は遺構の完掘や細部、遺物出土状況をカラーとモノクロの 35㎜ネガフィルムで行った。

整理　市立考古博物館内で実施した。遺構図は平面・断面の組み合わせ調整後にデジタルトレースを行い、ロームマウンドとピット 2 基以外を縮尺 1/80 で掲載した。出土遺物は洗浄、接合の後、近現代の混入品を除き全点を計量し、可能なものを実測した。遺物のトレースはデジタルで行った。

標準土層　表土・耕作土（Ⅰ層）が 20 ～ 40㎝、水田の影響を受けた粘性の強い灰色シルト質土（Ⅱ層）、同様の黄灰色シルト質土（Ⅲ層）が 20 ～ 30㎝の厚さで続き、その下部は粘性の強い黒褐シルト質土（Ⅳ層）が 10 ～ 15㎝で、徐々に同質の暗黄褐土（Ⅴ層）に漸移し、ほとんどの遺構はⅣ層中位からⅤ層上部で検出した。Ⅳ・Ⅴ層には地点によって若干の礫が伴った。

2　発見された遺構

(1) 竪穴建物（第 1 表、第 4 図）

A 区で 2 棟、B 区で 1 棟の計 3 棟を検出した（遺構番号は 1 ～ 3 号）。A 区東側から B 区にかけて分布している。出土遺物によって推定される時期はすべて古墳時代後期～末である。

第 1 号竪穴建物　A 区東側に位置する。西半分を攪乱で失い、土 19 にも大きく切られる。完存する東壁は 3.2 m、北壁と南壁の残存部はそれぞれ 1.6 m と 1.1 m で、本来の平面形は一辺 3 m前後の方形を呈していたと推定する。床面には緩やかな起伏があり、検出面からの深さは 12 ～ 20㎝を測る。北半のピット 2 基以外に付随する施設の検出はなかった。

第 2 号竪穴建物　A 区東端に位置する。平面形は一辺が 4.4 mほどの隅丸方形と推定するが、南東コーナーの一帯は調査区外、西壁と北西・南西コーナーは削平をうけて、いずれも詳細は不明である。南北軸はほぼ北を指している。床面には緩やかな起伏があり、検出面からの深さは 15 ～ 25㎝を測る。ピットは 8 基確

第 3 図　本郷高田遺跡全体図

認されたが径や深さが柱穴とは思えないものが多く、柱穴配置の推定はできない。床面中央部北と南の焼土（F_1・F_2）はカマド痕跡とするには位置的に無理があり、カマドの有無、位置は推定できない。

第３号竪穴建物　B区中央部南東寄りにあり、建１（P_2～P_4）と土26に切られる。平面形は5.8×5.6 mの隅丸方形を呈し、主軸方向N88Wを指す。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは25～35cmを測る。西壁と南壁西半を除く壁直下に幅12～15cm、深さ10cm前後の壁際溝（周溝）が巡る。西壁中央部の建１掘方（P_2）に破壊される付近に焼土（F_1）が認められ、カマドは西壁中央に設けられていたと推定する。ピットは12基検出された。P_2・P_3・P_5・P_8・P_9・P_{11}の６基は方形に配列し、うちP_5・P_8には柱痕らしき土層がある。これらが主柱穴であろう。また壁際のP_7・P_{10}にも柱痕らしき土層や底面の凹凸があり、他より径が大きい。主柱穴とは別の役割を持つものの可能性がある。

(2) 掘立柱建物（第１表、第５図）

B区南半部で１棟を検出した（１号）。３住の南西部を切っている。南部が調査区域外にかかるので全容は不明だが、梁行２間、桁行３間以上の側柱式建物で、調査部分では5.4×9.2 mを測る。柱間は梁方向が270cm、桁方向が300cmほどとみられる。主軸は桁行方向でN2Wを指している。掘方は８基（P_1～P_8）が確認された。平面形は一辺110～140cmの方形を基調とするが不整なものもある。断面形は深さ80～96cmで方形や逆台形を呈す。埋土の土層は水平に埋め戻された状況を示している。また大小の礫を意図的に詰めながら埋め戻した様子がP_1～P_5でうかがえる。柱痕はP_6を除くすべてで確認された。太さは20cm前後、P_1・P_2・P_5～P_8では掘方の底面よりも深く切り込んでいる。本址は７世紀後半に属する３住を切っているが、掘方から出土した土器のうち時期が推定できるものはすべて７世紀後半～末なので、本址の時期もそこに求められると考える。

(3) 竪穴状遺構（第６図）

A地区西端で１基が確認されている（１号）。P19に切られる。平面形は南北2.8 m、東西3.2 mのきわめて不整な楕円形を呈し、深さは最深部で70cmを測る。壁の傾斜は緩く底面との境界は不明瞭で、底面も凹凸に富む。埋土の土層は周囲から埋まった状況を呈すが、中央部に直立気味の土層境界線があり、特殊な埋没や埋め戻しが行われたか、本址に切り込む平面では捉えられなかった別の土坑が存在した可能性を示している。出土遺物でみると、縄文時代前期から中期前半までの土器が出土しており、特に前期前葉のものがまとまっているため、２基（２基以上）の遺構が重複していた可能性もある。

(4) 土坑（第１表、第６・７図）

径がおよそ50cm以上の単独の穴を土坑とした。28基を確認しており、分布は調査区全域に広がる。平面形や規模は様々である。出土した遺物からみて９基が縄文時代、19基が古墳時代後期～末に属すると推定する。後者はA区の東端部からB区に集中している。個々の土坑の詳細は一覧表に譲る。

(5) ピット（第１表、第７図）

土坑より小さい穴をピットとした。19基を検出している。A区東側からB区全域にかけて分布する。時期を特定できる遺物を伴ったものはないが、分布域が竪穴建物や掘立柱建物などと重なるため、それら７世紀後半～末の遺構群に付随するものである可能性が高い。個々のピットの詳細は一覧表に譲る。

第１表　本郷高田遺跡・柳田遺跡遺構一覧

竪穴建物

《残存値》〈推定値〉

遺構No.	平面形	主軸方向	長軸×短軸×深（cm）	床面積（㎡）	新旧関係		備考
					本址より旧	本址より新	
1	隅丸方形？		322×(160)×15	(4.41)		土19	
2	隅丸方形？		443×(406)×22	(14.81)			
3	隅丸方形	N-88°-W	588×556×32	〈29.98〉		土26・建1P2・P3・P4	

掘立柱建物

（残存値）〈推定値〉

遺構	平面形 柱配り	主軸方向 面積（㎡）	規模（cm）	柱間寸法（cm）	P№	平面形	柱穴規模（cm） 長径	短径	深さ	備考
高田 建1	長方形 側柱	N-2°-W (46.6)	(3間)×2間 (880)×530	桁行280～292 梁行262	1	不整形	163	142	61	柱痕、礫
					2	方形	150	148	53	柱痕？、礫
					3	方形	132	118	39	柱痕、礫
					4	方形	146	128	48	柱痕、礫
					5	方形	142	138	45	柱痕、礫
					6	方形	(95)	132	32	柱痕
					7	方形	132	132	40	柱痕
					8	方形	124	124	48	柱痕、礫
柳田 建3	長方形 側柱	N-4°-E (74.0)	(4間)×3間 (1000)×740	桁行224～288 梁行240～256	1	円形	154	148	80	柱痕
					2	隅丸方形	134	122	74	P_{21}に切られる
					3	隅丸方形	146	146	74	抜き取り痕
					4	円形	(130)	126	90	柱痕
					5	隅丸方形	140	136	108	抜き取り痕
					8	隅丸方形	146	134	104	柱痕
					9	円形	142	130		
					10	隅丸方形	123	120	94	柱痕
					11	楕円形	138	114	97	抜き取り痕、P_{18}に切られる
					12	楕円形	176	134	96	抜き取り痕
					13	楕円形	156	118	76	柱痕
					14	隅丸方形	133	120	76	抜き取り痕、P_{20}を切る
					6	楕円形	102	65	43	抜き取り痕
					7	楕円形	<68>	60	35	柱痕
柳田 建3 関連？					15	円形	142	124	14	
					16	円形	61	59	22	
					17	楕円形	140	(98)	39	
					18	円形	76	(66)	34	
					19	楕円形	72	41	23	P_{20}を切る
					20	不整形	170	54	8	P_{14}・P_{19}に切られる
					21	楕円形	91	52	16	P_2を切る
					22	円形	100	80	26	P_{11}を切る

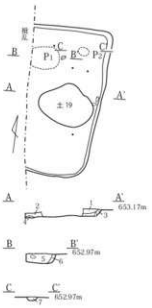
土坑

№	地区	平面形	規模（cm） 長径	短径	深さ	新旧関係 本址より旧	本址より新	備考
1	A	円形？	(48)	78	56			調査区
2	A	楕円形	65	31	18			
3	A	楕円形？	61	(40)	45			調査区
4	A	円形	89	86	58			
5	A	楕円形	67	43	52			
6	A	楕円形	108	78	37			
7	A	楕円形	77	53	17			
8	A	隅丸方形	101	86	38			
9	A	楕円形	74	57	33			
10	A	円形	76	66	39			
11	A	円形	55	51	35			
12	A	円形	50	46	36			
13	A	円形	82	79	67			
14	A	不整形	260	(120)	11			
15	A	円形	82	82	53			
16	A	楕円形	111	96	74			
17	A	楕円形	172	29	15			
18	A	円形？	75	(30)	99			試掘
19	A	楕円形	118	89	9	1住		
20	A	隅丸方形？	143	(70)	34			調査区
21	B	楕円形	79	63	21		建1P_1	
22	B	円形	71	66	28			
23	B	円形	83	79	55			
24	B	円形	81	78	44			
25	B	楕円形	103	(35)	28			調査区
26	B	楕円形	89	<68>	49		3住	
27	B	円形？	90	50	27			調査区
28	B	楕円形	64	48	23			

ピット

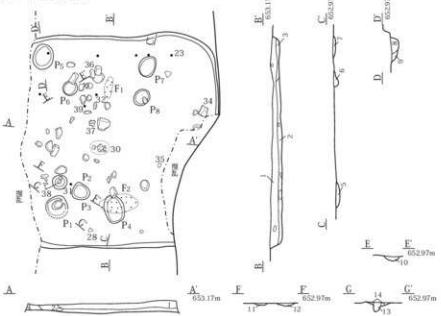
№	地区	平面形	規模（cm） 長径	短径	深さ	新旧関係 本址より旧	本址より新	備考
1	A	楕円形	32	22	16			
2	A	円形	17	15	8			
3	A	円形	31	29	24			
4	A	楕円形	35	30	26			
5	A	円形	28	27	20			
6	A	楕円形	16	11	12			
7	A	楕円形	35	26	10			
8	A	楕円形	35	23	9			
9	A	円形	38	33	12			
10	A	楕円形	35	25	41			
11	B	円形	35	28	15			
12	B	円形	45	33	20			
13	B	円形	41	41	18			
14	B	円形	47	42	42			
15	B	円形	43	35	15			
16	B	楕円形	49	38	24			
17	B	円形	34	32	23			
18	B	円形	39	34	41			
19	B	楕円形	58	43	27	溝1		

第１号竪穴建物



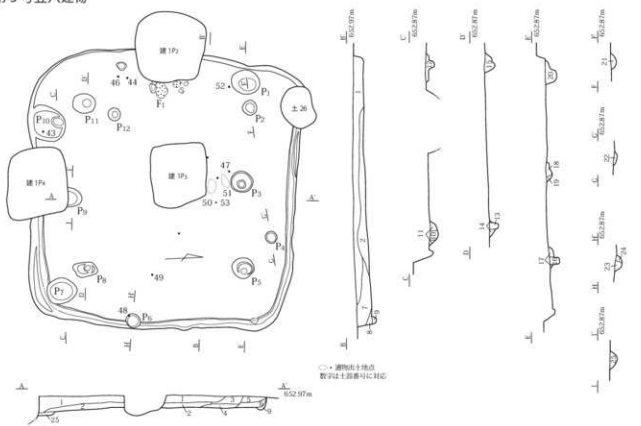
1：黒褐色土
2：黒褐色土（焼土粒・炭化物 少）
3：黒褐色土（焼土粒 少）
4：黒褐色土（焼土粒 多）
5：黒褐色土
6：暗褐色土
7：黒褐色土（黄色土粒 少）

第２号竪穴建物



1：黒褐色土（白色砂粒 少）
2：黒褐色土（黄色土粒 少）
3：黒褐色土（焼土粒 少）
4：黒褐色土（焼土粒・黄色土粒・白色砂粒 少）
5：暗褐色土（焼土・炭化物 少）
6：暗褐色土
7：暗褐色土
8：黒褐色土
9：暗褐色土
10：黒褐色土
11：暗褐色土
12：暗褐色土（炭化物・焼土 少）
13：黒褐色土（柱痕）
14：暗褐色土

第３号竪穴建物

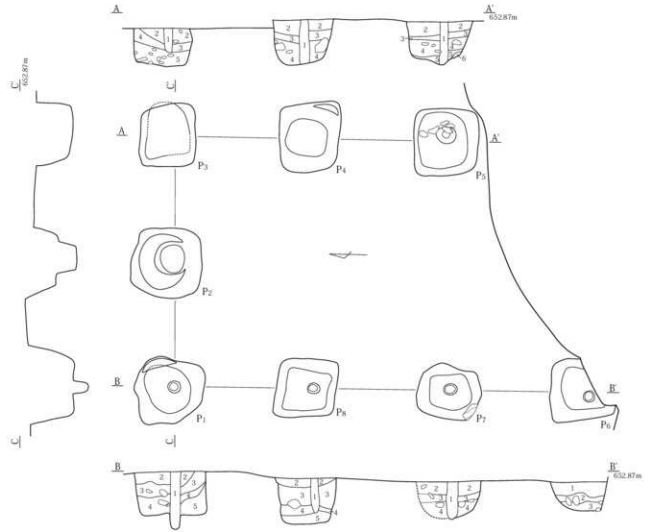


1：黒褐色土（白色砂粒 多）
2：黒褐色土（黄色土粒 多）
3：黒褐色土（黄色・白色砂粒 少）
4：黒褐色土（黄色土ブロック 少）
5：暗褐色土（白色・黄色砂粒 少）
6：暗褐色土（黄色土ブロック 少）
7：黒褐色土
8：暗黄褐色土
9：暗褐色土（壁際溝）
10：暗褐色土（柱痕）
11：暗褐色土（黄色土塊 少）
12：黒褐色土
13：暗褐色土（柱痕）
14：暗褐色土
15：暗褐色土（黄色土粒 少）
16：暗褐色土（柱痕）
17：暗褐色土
18：暗褐色土
19：暗黄褐色土
20：黒褐色土
21：暗褐色土
22：暗褐色土
23：黒褐色土
24：暗色土（黄色土粒 少）
25：黒褐色土（黄色土粒 少）

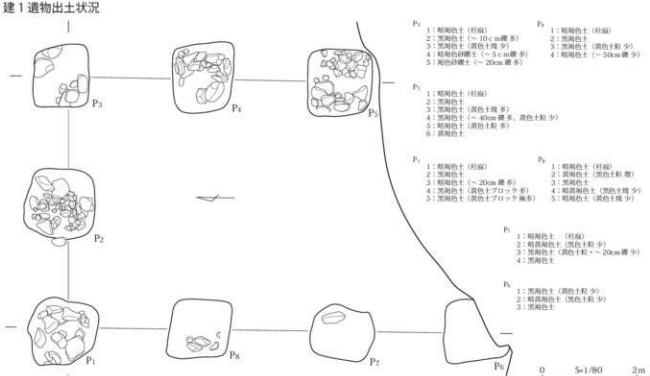
0　S=1/80　2m

第４図　本郷高田遺跡竪穴建物

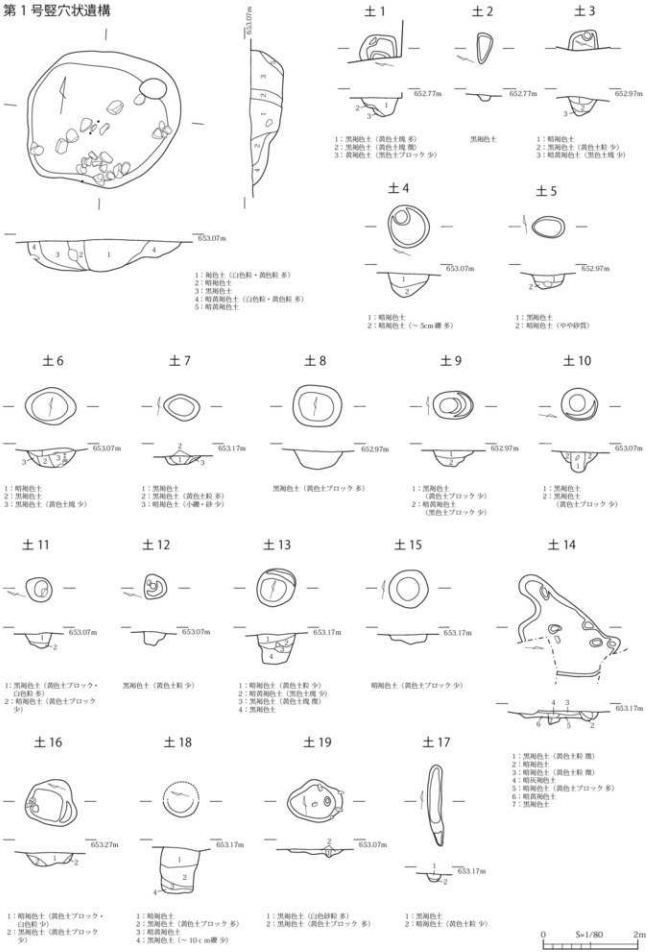
第１号掘立柱建物



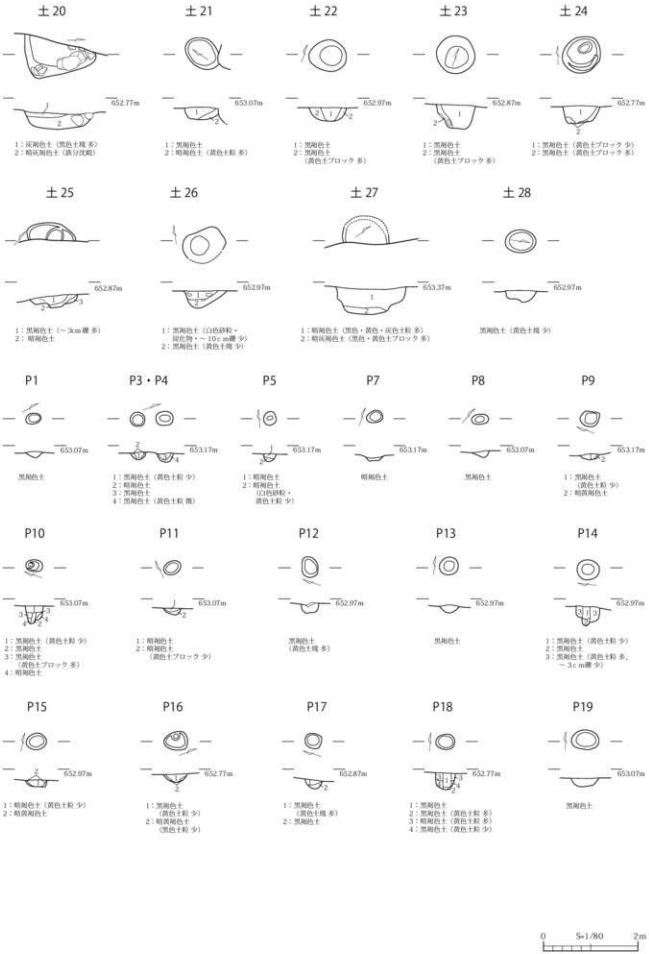
建１遺物出土状況



第５図　本郷高田遺跡掘立柱建物



第６図　本郷高田遺跡竪穴状遺構・土坑 (1)



第７図　本郷高田遺跡土坑 (2)・ピット

3　出土遺物

(1) 土器・土製品

遺構内と検出面から 17.37kgの土器・土製品が出土した。103 点を拓影と実測図で示した。種別は縄文土器と土師器・須恵器だが、縄文土器以外はほとんどが古墳時代後～末期の所産と考える。

ア　縄文土器（第２表、第８図１～21）

総量は 0.86kgで出土土器全体の 4.95％にすぎない。すべて破片で全形がわかるものはない。21 点の拓影を提示できた。出土地点は１～12 が竪 1、13 が２住、14 が３住、15 が土 14、16 は LM、17 ～ 19 がＡ区検出面、20・21 がＢ区検出面である。竪１からまとまった出土があり、2・3 住のものは混入品と考える。1 ～ 7 は胎土に繊維が多量に含まれる厚手の土器で、外器面に太く粗い単節縄文が施文されている。前期前葉に遡る土器群と考える。8 ～ 10 はやや細かい縄文が施文される薄手の破片で、胎土に繊維は含まない。前期前葉に相当するものとみたいが、小片で詳細はわからない。11・17 は前期末から中期初頭、12・13 は中期中葉、14 ～ 16・18・19・21 は中期後葉から末、20 は後期に属するものであろう。

イ　古墳時代後期の土器・土製品（第２表、第８～ 10 図）

須恵器と土師器があり、82 点を図化提示した。須恵器は、食膳具など小形品のほとんどを占めており、甕・壺類の中形品の比率も高い。ただし、焼成が不良で軟質なものや、胎土に大きな気泡が入り焼き歪んだ個体も少なからず見受けられる。土師器は少量の杯があるほかは厚手で雑な作りの甕類が大半を占めている。土製品は須恵器製の紡錘車（39・88）である。

須恵器の器種には杯蓋・杯・皿・高杯・壺瓶類・甕・器台がある。杯蓋は頂部につまみが付き端部内面にかえりを有す杯蓋Ａ（63・66 など）、端部が短く内側に屈曲する杯蓋Ｂ（97）、古墳時代に伝統的な器形でつまみがなく杯Ｈと組み合わされる杯蓋Ｈ（80・86 など）の３種がある。杯は体部が直線的に大きく開く杯Ａ（27・91 など）、高台を有する杯Ｂ（57）、体部の外開度が小さく直に近く立ち上がる杯Ｇ（28・56 など）、外周に蓋受け部を有し、古墳時代に伝統的な器形の杯Ｈ（43・44）の４種のほか、底部が丸底気味で外開する体部の中位に稜を持つ杯（29・30・75：杯Ｘと仮称）がみられる。皿は口径や底径に比して体部の立ち上がりが低く扁平な印象をうける無台の皿Ａ（99）である。壺瓶類は口縁部のみで全形がわかるものはないが短頸壺（60・93）や横瓶（83・84）となる可能性がある。甕は、中形の甕Ｃ（37・76）、大形の甕Ａ（36・94・103）になるとみられる口縁部や頸部、胴部破片がある。器台（38）は全形を知りえないが筒形で下方に向かって開く形態で、長く伸びる脚部の上段に円形透かしが６単位で巡り、その上のやや膨らみをみせる胴部にも円形透かしが脚部とは互い違いになるように配される。２本一組の沈線が横位４段で巡り、それに消されるように縦方向のハケメが残る。胎土は混入物のない良質なもので灰白色を呈すが、焼成が甘いため軟かく脆い。95 は三角形の透かし孔と細かい波状紋があり、装飾付き器台の脚部であろうか。淡い青灰色を呈す堅緻な焼成である。

土師器の器種には杯・甕・円筒土器がみられる。杯は薄手で精製された胎土を持ち、体部がわずかに内湾しながら直立する形態（32・33・45・82）と、やや厚手で内面に黒色処理が行われるもの（70）がある。前者は摩滅のため器面調整の詳細な観察ができない。甕は全形を知り得るものはない。いずれも器肉が厚く成形や調整が雑で、外形は頸部がややくびれるもの（46、おそらく 34・47・49 も同じ）と、頸部のくびれをまったく作らず口縁部から胴部に至るもの（48・74）の２種がみられる。後者には甑が含まれているかもしれない。底部は厚い平底や緩い湾曲の丸底を呈している。円筒土器（35・85）はいずれも全形を知りえない。35 には外面に縦方向の長い剥離痕があり、鰭状の突起が付されていたのであろうか。85 は外面にわずかにタタキかハケメがうかがえるので瓦の可能性もある。

ウ　出土地点別の内容

（ア）第１号竪穴建物出土品（第８図 22）

出土量は 0.4kgときわめて少なく、１点を図示できたのみ（22）。須恵器の杯Ｇあるいは杯Ａの底部と推定する。７世紀後半のものであろう。

（イ）第２号竪穴建物出土品（第８・９図 23 ～ 39）

総重量で 4.58kgが出土しているが、すべて大小の破片で完形品はない。17 点を図示できた。内訳は須恵器が杯蓋Ａ４点（23 ～ 26）、杯Ａ１点（27）、杯Ｇ１点（28）、杯Ｘ２点（29・30）、高杯１点（31）、甕Ａ２点（36・37）、器台１点（38）、土師器は杯２点（32・33）と甕１点（34）、円筒土器１点（35）、土製品は須恵器質の紡錘車１点（39）である。総体として７世紀後半のまとまった資料と考える。

（ウ）第３号竪穴建物出土品（第９図 40 ～ 54）

総重量 3.27kgが出土した。須恵器杯（43）の１点がほぼ完形のほかはすべて大小の破片である。15 点を図示できた。内訳は須恵器が杯蓋Ａ３点（40 ～ 42）、杯Ｈ２点（43・44）、土師器は杯１点（45）と甕９点（46 ～ 54）である。総体として７世紀後半のまとまった資料と考える。

（エ）第１号掘立柱建物出土品（第９・10 図 55 ～ 74）

本址を構成する８基の柱掘方（P_1 ～ P_8）から合計で 2.71kgが出土した。すべて破片であるが 20 点を図示できた。須恵器は杯蓋Ａ（55・63・66・67・69・71）、杯Ａ（68）、杯Ｂ（57）、杯Ｇ（56）、高杯（59）、壺（60）があり、その他では 58 が杯か高杯、61 は壺類になると推定するが特定できない。土師器は杯（70）、高杯（64）、甕（62・65・72 ～ 74）である。70 の杯は成形・調整にロクロ（回転）を用いた形跡がなく、内面には黒色処理が行われている。総体として７世紀後半の資料と考える。

（オ）土坑・ピット出土品（第 10 図 75 ～ 88）

土坑数基と単独ピットから土器が出土しているがすべて小破片である。量的にはＡ区の土坑・ピット出土の合計が 0.975kg、Ｂ区が 1.032kgで、このうち土坑から出土した 14 点を図化できた。須恵器の杯蓋Ａ（77 ～ 79・81）、杯蓋Ｈ（80・86）、杯（75・87）、甕（76）、壺瓶類（83・84）、土師器の杯（82）、円筒土器（85）がある。土製品は須恵器質の紡錘車（88）で、上部を欠損するが断面が低い台形を呈するものであろう。いずれの土器も２・３住出土品と類似する時期のものと考える。

（カ）検出面等出土品（第 10 図 89 ～ 103）

遺構検出面やその上部の包含層、ロームマウンド（風倒木痕）からも少量の土器が出土している。Ａ区で 1.16kg、Ｂ区で 2.34kgを量り、うち 15 点を図化できた。須恵器の杯蓋Ａ（89・96）、杯蓋Ｂ（97）、杯蓋Ｈ（90）、杯Ａ（91・92・98）、皿（99）、壺（93）、甕（94・103）、器台？（95）、土師器の高杯（100・101）、甕（102）がある。出土状況などから一体性がある土器群とは認められないが、調査地全体の時期や性格を考える参考になろう。

No	地点	種別	器種器形	成形・調整・紋様など	その他・備考	注記
1	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期	056
2	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期	052
3	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期	056
4	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期	052
5	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期	052
6	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期	051
7	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期	052
8	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期か	057
9	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期か	056
10	竪１	縄	深鉢	縄文、繊維含む、厚手	前期か	056
11	竪１	縄	深鉢	交互刺突	中期初頭～前葉	055
12	竪１	縄	深鉢	焼町式	中期中葉	053・055
13	２住	縄	深鉢	隆帯と沈線による方形区画	中期中葉	044
14	３住	縄	深鉢	唐草紋上器	中期後葉～末	126
15	土 14	縄	深鉢	列点刺突と隆帯（唐草紋上器）	中期後葉	068
16	LM	縄	深鉢	沈線区画に縄紋	中期中葉～後葉	089
17	A 区検	縄	深鉢	細い平行沈線	前期末～中期初頭	100
18	A 区検	縄	深鉢	唐草紋上器	中期後葉	100
19	A 区検	縄	深鉢	唐草紋上器	中期後葉	097
20	B 区検	縄	深鉢	横沈線	後期？	176
21	B 区検	縄	深鉢	唐草紋上器	中期後葉～末	180

第２表　土器一覧（縄文）

No.	地点	種別	器種器形	寸法 (cm)			残存		成形・調整・紋様など	その他・備考	注記
				口径	底径	器高	口縁	底部			
22	1住	須	杯	不	不	不	欠	3/4	ロ、底面回ケ	胎土灰白焼成非常に良好	004
23	2住	須	杯蓋A	9.8	−	不	1/4	−	ロ、回ケ、自然釉		016
24	2住	須	杯蓋A	不	−	不	欠	−	ロ、回ケ		043
25	2住	須	杯蓋A	8.8	−	不	1/10	−	ロ		040
26	2住	須	杯蓋A	不	−	不	不	−	ロ	破片実測	043
27	2住	須	杯A	12.7	不	不	1/16	欠	ロ、底面回ケ		044
28	2住	須	杯G	不	−	不	欠	不	ロ、底面回ケ後ナデ		034
29	2住	須	杯	12.0	不	不	1/12	欠	ロ	口縁直下に沈線状の窪み	039
30	2住	須	杯	12.2	−	5.3	2/3	完	ロ、底面回へ		026
31	2住	須	高杯	10.1	不	不	1/5	欠	ロ、回ケ	焼成不良軟質	030
32	2住	土	杯	14.8	不	不	1/3	欠	(摩滅)	橙灰色で良質な胎土	019
33	2住	土	杯	15.4	不	不	1/4	欠	(摩滅)	橙灰色で良質な胎土	043
34	2住	土	甕	不	不	不	欠	欠	外：工、内：輪、ナデ		027
35	2住	土	円筒	不	不	不	欠	欠	外：ナデ、内：輪、ナデ		029・044
36	2住	須	甕	28.2	不	不	1/5	欠	ロ、タタキ(外)		018
37	2住	須	甕	不	不	不	欠	欠	外：タタキ、内：摩滅	焼成不良軟質	023・043
38	2住	須	器台	不	25.0	不	欠	1/30	ロ、ハケメ、沈線	胎土は良質だが焼成不良軟質	031・032
39	2住	須	紡錘車	5.0	−	2.8	1/2	1/2	ナデ		020
40	3住	須	杯蓋A	9.8	−	不	1/4	−	ロ、回ケ		128・141
41	3住	須	杯蓋A	10.4	−	不	1/8	−	ロ、回ケ		126
42	3住	須	杯蓋A	12.0	−	不	1/16	−	ロ		130
43	3住	須	杯H	12.7	4.6	4.1	完	完	ロ、回ケ		119
44	3住	須	杯H	12.8	7.4	不	1/7	欠	ロ、回ケ		117・126
45	3住	土	杯	14.4	不	不	1/16	欠	ヨ、ナデ		130
46	3住	土	甕	16.6	不	不	完	欠	ヨ、工(外)、輪・ナデ(内)		118
47	3住	土	甕	不	7.0	不	欠	完	工、木葉(底)、輪・工(内)		109・110
48	3住	土	甕	17	9.0	13.2	1/16	1/16	工、太ミガキ(内)		121・125
49	3住	土	甕	不	6.0	不	欠	完	外：ナデ、ケ、内：工		108
50	3住	土	甕	15.4	不	不	1/6	欠	ヨ、工		112
51	3住	土	甕	17.2	不	不	1/6	欠	ヨ、工		111
52	3住	土	甕	不	9.2	不	欠	1/7	工、木葉(底)		115
53	3住	土	甕	不	7.5	不	欠	1/16	ナデ、ケ		112
54	3住	土	甕?	不	3.6	不	欠	完	ナデ、ケ		128
55	建1P_1	須	杯蓋A	10.8	−	不	1/12	−	ロ		136
56	建1P_1	須	杯G	不	6.3	不	欠	1/4	ロ、回ケ		136
57	建1P_1	須	杯B	不	5.6	不	欠	1/4	ロ、回ケ		137
58	建1P_1	須	高杯	11.2	不	不	1/16	欠	ロ	土26(168)と接合、38と同個体?	136・168
59	建1P_1	須	高杯	不	不	不	欠	欠	ロ	土20(157)と接合、37と同個体?	136・157
60	建1P_1	須	壺	12.2	不	不	1/4	欠	ロ		137・139
61	建1P_1	須	壺?	6.8	不	不	1/4	欠	ロ		136
62	建1P_1	土	甕	不	9.2	不	欠	1/8	ナデ		136
63	建1P_2	須	杯蓋A	9.6	−	1.8	1/4	−	ロ、回ケ		140
64	建1P_2	土	高杯	不	10.4	不	欠	1/5	工		140
65	建1P_2	土	甕	不	6.2	不	欠	1/3	工、木葉(底)		140
66	建1P_3	須	杯蓋A	10.2	−	不	1/2	−	ロ、回ケ	3住(126)と接合	141・142・126
67	建1P_3	須	杯蓋A	10.0	−	不	1/6	−	ロ、回ケ		142
68	建1P_3	須	杯A	不	4.6	不	欠	1/4	ロ	焼成不良軟質	141
69	建1P_4	須	杯蓋A	10.8	−	不	1/8	−	ロ、回ケ		143
70	建1P_4	土	杯	9.6	不	不	1/10	欠	外：ナデ、内：ミガキ、黒		144
71	建1P_5	須	杯蓋A	9.8	−	不	1/8	欠	ロ、回ケ		147
72	建1P_5	土	甕	不	9.0	不	欠	1/5	外：工、内：ナデ		147
73	建1P_6	土	甕	不	5.6	不	欠	3/5	工		148
74	建1P_8	土	甕	17.6	不	不	1/8	欠	工		151
75	土16	須	杯	10.7	4.7	5.1	1/8	1/2	ロ、底面回へ	土15(070)と接合、焼成不良歪む	071・070
76	土16	須	甕	不	不	不	不	不	ロ	破片実測	071
77	土18	須	杯蓋A	10.1	−	不	1/3	欠	ロ、回ケ	歪む	072
78	土18	須	杯蓋A	不	−	不	不	−	ロ、回ケ	破片実測	072
79	土18	須	杯蓋A	不	−	不	不	−	ロ、回ケ	破片実測、気泡	072
80	土20	須	杯蓋H	8.9	−	不	1/12	−	ロ、回ケ		157
81	土24	須	杯蓋A	不	−	不	不	−	ロ	破片実測	163
82	土24	土	杯	12.0	不	不	1/12	欠	(摩滅)		163
83	土25	須	壺瓶?	13.0	不	不	1/8	欠	ロ	歪む	165
84	土25	須	壺瓶?	11.2	不	不	1/10	欠	ロ	歪む	164
85	土25	土	円筒?	不	不	不	欠	欠	外：タタキ、内：ナデ	瓦?	166
86	土26	須	杯蓋H	9.3	−	3.5	1/16	−	ロ、回ケ		168
87	土26	須	杯	不	4.4	不	欠	2/3	ロ、回ケ、底面回へ		168
88	土28	須	紡錘車	6.2	−	不	3/5	−	ナデ		169
89	A区検	須	杯蓋A	不	−	不	欠	−	ロ、回ケ		095
90	A区検	須	杯蓋H	不	−	不	欠	−	ロ、回ケ		098
91	A区検	須	杯A	11.0	不	不	1/6	欠	ロ		100
92	A区検	須	杯A	不	5.6	不	欠	1/4	ロ、底面回へ		100
93	A区検	須	壺?	15.6	不	不	1/16	欠	ロ、沈線(外)		095
94	A区検	須	甕	20.8	不	不	1/12	欠	ロ	焼成不良軟質	タカダ
95	A区検	須	器台?	13.2	14.6	6.3	1/3	1/12	ロ、波状文、沈線	3住(127)・建1P1(136)と接合	102・127・136
96	B区検	須	杯蓋A	10.0	−	不	1/3	−	ロ、回ケ		175・180
97	B区検	須	杯蓋B	10.4	−	不	1/8	−	ロ		179
98	B区検	須	杯A	不	−	不	欠	完	(摩滅)	焼成不良軟質	180
99	B区検	須	皿	20.0	15.1	2.8	1/12	1/12	ロ、手持ちケ	焼成不良	180
100	B区検	土	高杯	18.6	不	不	1/16	欠	外：ヨ、内：ミガキ、黒		177
101	B区検	土	高杯	不	不	不	欠	欠	外：ナデ、内：ミガキ、黒		179
102	B区検	土	甕	不	7.2	不	欠	1/8	外：ナデ、ケズリ状ナデ、内：工		180
103	B区検	須	甕	不	不	不	不	不	ロ	破片実測	180

寸法・残存欄略記：計測不能→不、欠損→欠、成形・調整・紋様欄略記：ロクロナデ→ロ、ヘラケズリ→ケ、回転ヘラケズリ→回ケ、回転ヘラ切り→回へ、ヨコナデ→ヨ、工具ナデ→工、木葉圧痕→木葉、輪積み痕→輪、黒色処理→黒

第2表　土器一覧（古墳）

縄文 (1～21)

1 竪1
2 竪1
3 竪1
4 竪1
5 竪1
6 竪1
7 竪1
8 竪1
9 竪1
10 竪1
11 竪1
12 竪1
13 2住
14 3住
15 上14
16 LM
17 A検
18 A検
19 A検
20 B検
21 B検

※1～7は、胎土に繊維を含む

0 S=1/3 10cm

1住 (22)

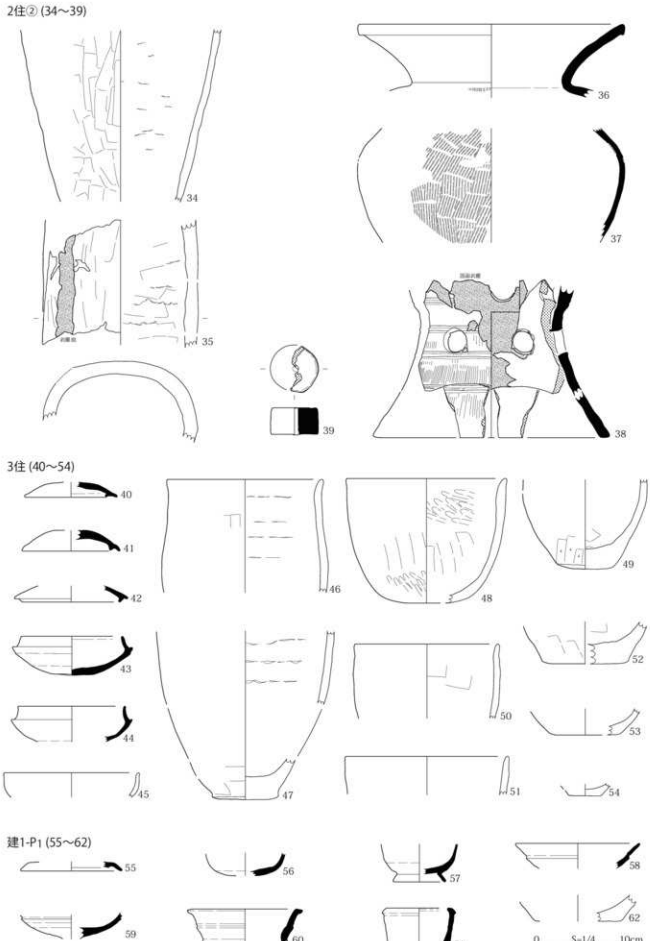
22

2住① (23～33)

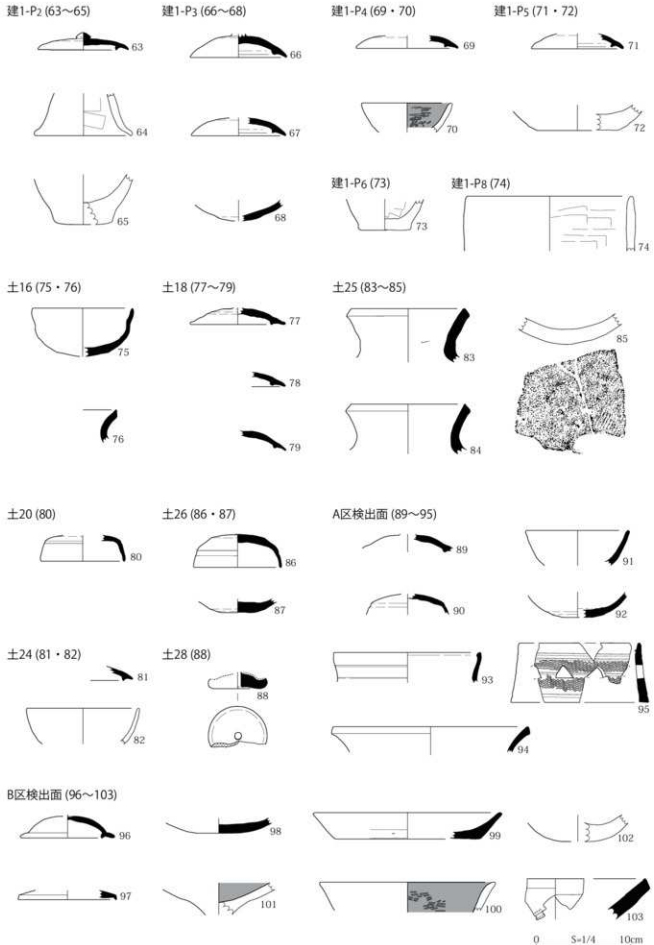
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

0 S=1/4 10cm

第8図　本郷高田遺跡縄文土器拓影・土器実測図 (1)



第 9 図　本郷高田遺跡土器実測図 (2)



第 10 図　本郷高田遺跡土器実測図 (3)

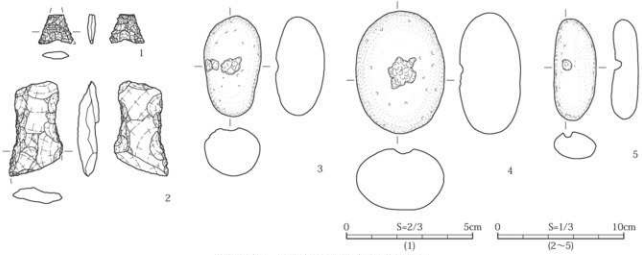
(2) 石器（第３表、第 11 図）

合計23点の石器が出土した。このうち遺存状態の良い定型石器を中心に５点を図示し、その概要を述べる。それ以外のものは第３表を参照されたい。石器の帰属する時期は共伴する土器に準じるものと考えられる。

１は、黒曜石製で、無茎凹基鏃である。基部の抉りは浅く、側辺はやや内湾する。２は、砂岩製の打製石斧である。刃部が欠損しているが、刃部に向かって幅が広がっているのが認められるため、平面形は撥形を呈していると考えられる。３～５の凹石はいずれも竪１からの出土で、砂岩製である。３・４のくぼみの深さは 1.7㎜と 3.2㎜と浅く、敲打によって不整形な平面形を呈している。一方、５のくぼみは直径 7.6㎜、深さ 5.6㎜の錐で穿ったような円筒状の孔が観察された。

(3) 金属製品

７点の出土がある。遺構からは２住北西部埋土、土 17 埋土、建 1P6 上部から出土した。２住は長さ 33.8㎜、幅 11.8㎜、厚さ 5.3㎜、重量 2.4 ｇの鉄片、土 17 は長さ 24.3㎜、幅 7.6㎜、厚さ 7.43㎜、重量 2.2 ｇの鉄片でいずれも器種不明、建 1P6 は鉄の丸釘で近現代の混入品と思われる。検出面からは丸釘３点と銅銭破片が出土した。丸釘は近現代のものである。銅銭は 1/3 ほどの残欠で「元」と「寶」の文字がうかがえる。



第 11 図　本郷高田遺跡石器実測図

図	写図	器種	区	遺構	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考
1		磨石	A	1住	安山岩	(7.28)	(5.45)	(4.38)	(190.5)	3/4 欠	断面形扁平な楕円形、磨面表裏面、№２と同一か
2		磨石	A	1住	安山岩	(4.30)	(5.58)	(4.37)	(147.8)	3/4 欠	断面形扁平な楕円形、磨面表裏面、№１と同一か
3		剥片	A	2住	黒曜石	1.44	0.56	0.21	0.2	完形	
4		剥片	A	竪1	黒曜石	2.53	1.36	0.23	1.1	完形	
5		磨石	A	竪1	砂岩	5.30	4.50	4.13	129.0	完形	平面形円形、断面形円形、磨面表面
6	3	凹石	A	竪1	砂岩	7.82	4.37	3.82	167.0	完形	平面形楕円形、断面形円形、凹部（表面１、不整形、φ 0.84cm、深さ 0.17cm）
7		磨石	A	竪1	砂岩	11.75	5.95	4.78	438.9	完形	平面形楕円形、断面形楕円形、磨面表面
8		磨石	A	竪1	砂岩	11.83	6.23	54.00	620.0	完形	平面形楕円形、断面形方形、磨面表裏面、下側面に敲打痕か
9		凹石	A	竪1	安山岩	12.85	9.07	4.87	739.4	完形	平面形歪な楕円形、断面形楕円形、凹部（表面３、不整形、φ 1.69cm、1.26cm、1.04cm、深さ 0.72cm、0.47cm、0.4cm）、磨面表裏面
10	4	凹石	A	竪1	砂岩	9.53	6.83	4.81	404.1	完形	平面形楕円形、断面形楕円形、凹部（表面１、不整形、φ 2.05cm、深さ 0.32cm）
11	5	凹石	A	竪1	砂岩	7.92	3.37	2.16	77.5	完形	平面形長楕円形、断面形楕円形、凹部（φ 0.76cm、深さ 0.56cm）
12		磨石	A	竪1	安山岩	11.48	5.38	3.27	265.4	完形	平面形不定形、断面形楕円形、磨面表裏側面
13		剥片	A	±14	粘板岩	4.30	2.61	5.10	5.8	完形	２個体に割れ
14		石鏃	A	検出面	黒曜石	3.52	3.02	1.04	9.0	完形	平面形中央に張り出し有り。鏃部（断面形三角形、先端形稜線を有する）、加工部位（両面加工、鏃部とわずかに基部）
15		剥片	A	検出面	チャート	4.51	2.11	6.80	4.2	完形	
16		剥片	A	検出面	チャート	2.07	1.83	0.96	3.2	完形	
17		石鏃	A	検出面	黒曜石	3.12	2.17	1.06	6.0	完形	無茎凸基（実基）、側辺（片側外曲、片側直線）、先端普通
18	1	石鏃	A	LM	黒曜石	(1.09)	(1.37)	(0.20)	(0.3)	1/4 欠 (尖頭部と片逆刺欠)	無茎凹基（抉り浅い、逆刺鋭い）、側辺内曲
19		二次加工ある剥片	B	建1P3	チャート	3.60	2.65	0.74	7.1	完形	横長剥片、両面加工、加工部位１側縁
20		石鏃	B	建1P6	チャート	2.66	2.02	0.67	2.6	完形	無茎凸基（実基）、側辺はほぼ直線、先端鋭い
21		剥片	B	±23	黒曜石	3.87	1.92	0.57	4.6	完形	
22		剥片	B	±26	黒曜石	2.47	1.34	0.63	1.1	完形	
23	2	打製石斧	B	検出面	砂岩	(6.85)	(3.90)	(1.42)	(47.2)	1/4 欠（刃部欠）	側縁形撥型

第３表　本郷高田遺跡石器一覧

Ⅳ　柳田遺跡の調査

1　調査の概要

(1) 調査地、調査と整理の方法

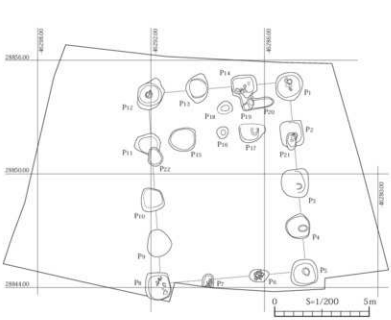
建設範囲全域を対象としたが、排土置き場や安全勾配を確保した結果、調査面積は 209.854㎡である（第12図）。調査はパワーショベルで表土と遺構検出面付近までを削り込み、次いで人力で遺構を検出した。本調査に先立つ試掘で掘立柱建物の存在が予測されていたため、まず柱穴掘方すべての配置と平面形の把握に努めた。調査地内での掘立柱建物全景の確認後、各掘方の段掘りと半割、土層の観察と実測、写真撮影を行った。その後、掘方の全掘と測量、全景の写真撮影をした。遺物は柱穴ごとの取り上げを予定したが、検出面を含めて皆無に近い。平面図と土層図は 1/20 縮尺で作成、写真はカラーとモノクロの 35㎜ネガフィルムで撮影した。整理作業は市立考古博物館内で実施し、その内容や工程は前章と同じである。

(2) 標準土層

一帯は耕作土（Ⅰ層）とその直下の水田の影響を受けたと思われる黄灰色弱粘質土（Ⅱ層）が約 50㎝厚で広がる。その下部は粘性があって固く締まる黒褐シルト質土（Ⅲ層）と砂粒が多く混じる同様の黒褐シルト質土（Ⅳ層）が 30 ～ 40㎝厚で続き、場所によってはこのⅢ・Ⅳ層に多くの砂礫が混じる。さらにその下部はやや礫が混じる暗褐シルト質土（Ⅴ層）、黄褐シルト質土（Ⅵ層）が 30 ～ 40㎝厚で続き、遺構はⅤ層を削り込む中で検出した。それ以下は 50 ～ 300㎜径の礫による砂礫層である。

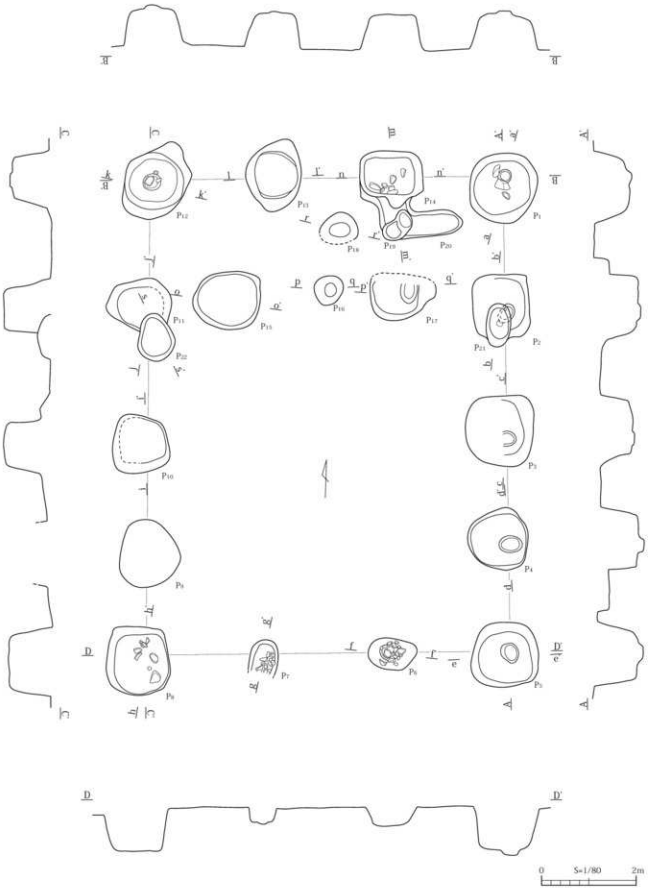
2　発見された遺構と遺物（第1表、第13・14図）

掘立柱建物 1 棟を検出した（第3号※）。南端部が調査区域外にかかるので全容は不明だが、梁行 3 間、桁行 4 間以上の側柱式建物で、調査部分では 7.4 × 10.0 m を測る。柱間は梁方向が 240 ～ 256㎝、桁方向が 224 ～ 288㎝である。主軸は桁行方向で N4 E を指している。主要な掘方は 12 基（P_1 ～ P_5・P_8 ～ P_{14}）が確認でき、平面形は隅丸方形を基調とするが、かなり不整で円形に近いものもある。規模は最大長 1.2 ～ 1.5 m、深さ 0.7 ～ 1.1 m を測る。埋土は黒褐色土に大きな黄褐色土ブロックが斑状や層状に入るものが基本で、それを縦に切る柱痕が明瞭なもの（P_1・P_4・P_{13}）、抜き取り痕らしき層がみられるもの（P_3・

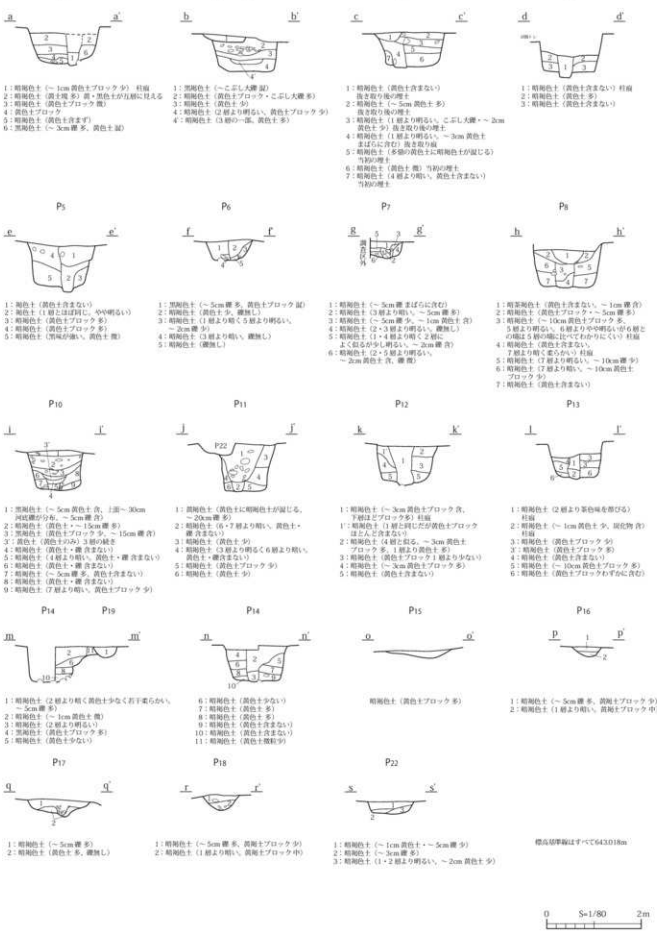


第 12 図　柳田遺跡全体図

柳田遺跡　建 3 北側柱穴列 (西から)



第 13 図　柳田遺跡掘立柱建物平面図



第14図　柳田遺跡掘立柱建物断面図

P_5・P_{11}・P_{12}・P_{14})、水平に埋め戻したような状況を呈すもの（P_2・P_{10}）がある。P_8・P_{10}は埋土の上層に径 10 ～ 20㎝の亜円礫が集めてあった。この 12 基の他に規模の小さいP_6・P_7の 2 基も位置からみて本址に伴うもので、柱痕に関わる土層が残る。このほか一帯にはP_{15} ～ P_{22}の大小 8 基のピットが本址に重複するように分布し、いずれにも柱痕らしき土層はないが位置的に本址に関連がある遺構と推定する。

遺物は土師器と須恵器の細片が試掘時と本調査の検出面からごく少量出土したのみで、詳細はわからない。時期は須恵器片がある点から 8 世紀後半～ 9 世紀前半頃と推定したいが確実ではない。

（※ 2 次調査で建 1・2 が確認されているため、3 号とした。）

柳田遺跡調査区全景（南から）

柳田遺跡調査区全景（西から）

V　総括

1　掘立柱建物の規模

今回報告の両遺跡の掘立柱建物は非常に規模の大きいもので、建物全体と個々の柱掘方でそれがいえる。建物全体では、本郷高田遺跡の掘立柱建物（以下「高田建物」と略す。柳田遺跡も同様。）が梁行２間、桁行３間以上、柳田建物は梁行３間、桁行４間以上（南辺の中間の２柱穴が小さいので、さらに南に続くと推定）としか把握できていないが、面積は高田建物が46.8㎡以上、柳田建物が74.5㎡以上となる。参考までに松本市内で発見された古代の掘立柱建物のうち面積が40㎡以上について第４表に集成したが、現況でも柳田建物は最大、高田建物は７位にあり、いずれも全形が把握できればさらに大きくなることは確実である。また、面積だけでなく掘方の径も他例に比べ突出していることがわかる。

2　掘立柱建物の掘方埋土

高田建物の掘方はすべて水平に埋められており P_6 を除く７基で柱痕が確認できた。柳田建物の掘方は多様で、規模の大きい12基には柱痕があるものと抜き取り痕のような土層が伴うもののほか、下部に柱痕状の土層を残しながら上部は水平に埋め戻された状況を呈するもの（P_2・P_8・P_{10}）がある。このうち P_8 と P_{10} には上部や上層に大きな礫が集められており、現地を視察された宮本長二郎氏からは掘立柱を礎石立ちに改修した可能性があることを指摘された。

3　本郷高田遺跡の出土土器構成について

土器を実見した鳥羽英継氏からは「食膳具で歴史時代的須恵器（杯Ａ、杯蓋Ａなど※筆者注）が圧倒的に多く、土師器が少ないという特徴がある。７世紀後半代は、時代の先を行く先進的な集落（官衙に近いところなど）は須恵器が多く、その周辺の一般的集落では須恵器が少なく（場合によっては須恵器がなく）土師器が多いという特徴を持つことを考えると、この集落は時代の先端を行く集落（官衙的な集落か、それに近い集落）の可能性がある。」というコメントをいただいている。

4　古代史への視点

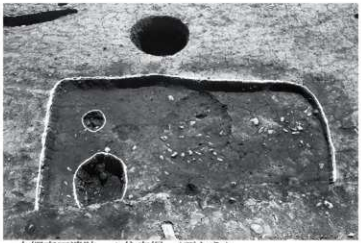
今回報告の遺跡周辺では希少な遺物の出土が目立つ。南隣の大村遺跡からは鴟尾を伴った多量の瓦や多数の緑釉陶器、銙帯金具、陶硯、同じく大輔原遺跡の北部からも数点の陶硯、銙帯金具の出土がある。加えて今回報告の大形掘立柱建物の存在は、この一帯が古代筑摩郡の推定領域の中で特異な場所ということができる。長野県の古代史研究で以前から課題となっていた日本書紀が記す「東間温湯」や、令制東山道、信濃国府などの位置究明を進めていくうえで、これら発掘成果の検討が進むことを期待している。

遺跡・調査名	遺構名	梁×桁（間）	梁×桁（m）	面積（㎡）	掘り方径（cm）	時期	備考	文献
柳田３次	３号	３×４以上	7.2 × 10.2 以上	73.4 以上	130 ～ 160	４～６期?	側柱	本書
小池１次	１号	３×６	5.7 × 12.5	71.3	84 ～ 136	７～８期	側柱、２面庇・孫庇	8
宮の前	４号	２×５	5.7 × 10.7	61	72 ～ 124	３～４期	側柱、２面庇	9
小池１次	２号	３×６	5.8 × 10.3	59.7	40 ～ 104	７～９期	側柱、２面庇	8
宮の前	１号	２×３	5.4 × 9.5	51.3	40 ～ 116	特定不能	側柱	9
南梁（高速道地点）	ST560	３×５	5.54 × 9.08	50.3	96 ～ 126	１～２期	側柱、庇	11
本郷高田	１号	２×３以上	5.3 × 8.8 以上	46.6 以上	130 ～ 160	7C 後半～末	側柱	本書
三間沢川左岸２次	13 号	２×５	4.28 × 10.6	45.4	30 ～ 60	８期	側柱	10
南梁（高速道地点）	ST538	３×４	5.19 × 8.54	44.3	68 ～ 95	２～３期	側柱、庇	11
北梁（高速道地点）	ST8	２×３	4.06 × 10.44	42.4	65 ～ 90	～７期?	側柱	12
宮の前	５号	２×４	5.2 × 8.0	41.6	58 ～ 120	３～４期	側柱	9
千鹿頭北１次	６号	４×５	5.4 × 7.6	41	60 ～ 110	7C 後半	大壁建物	7

第４表　松本市内発見の大形掘立柱建物一覧（面積40㎡以上のもの）

本郷高田遺跡 A 区全景（西から）

本郷高田遺跡 B 区全景（北東から）


本郷高田遺跡　1住完掘　(西から)

本郷高田遺跡　2住完掘 (南から)

本郷高田遺跡　2住遺物出土状況 (38)

本郷高田遺跡　3住完掘 (北から)

本郷高田遺跡　3住遺物出土状況 (北から)

本郷高田遺跡　3住遺物出土状況 (43)

本郷高田遺跡　竪1遺物出土状況 (北西から)

本郷高田遺跡　表土剥ぎ

本郷高田遺跡建 I（南西から）

本郷高田遺跡建 I 段掘り（北から）

本郷高田遺跡　掘方 P_1 半割

本郷高田遺跡　掘方 P_3 半割

本郷高田遺跡　掘方 P_4 半割

本郷高田遺跡　掘方 P_5 半割

本郷高田遺跡　掘方 P_6 半割

本郷高田遺跡　掘方 P_7 半割

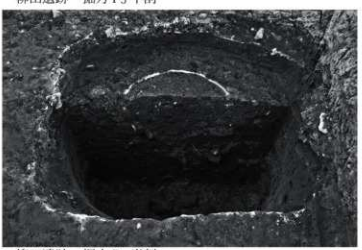
本郷高田遺跡　掘方 P_8 半割

本郷高田遺跡　調査スナップ

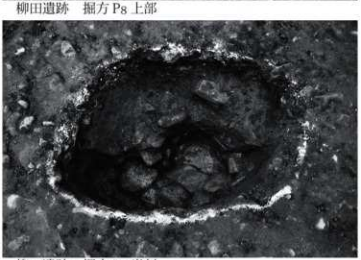
柳田遺跡　掘方 P_3 半割

柳田遺跡　掘方 P_5 半割

柳田遺跡　掘方 P_8 上部



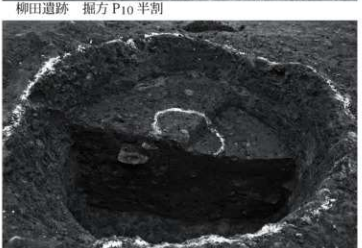
柳田遺跡　掘方 P_8 半割



柳田遺跡　掘方 P_6 半割

柳田遺跡　掘方 P_{10} 半割

柳田遺跡　掘方 P_{12} 半割



柳田遺跡　掘方 P_{13} 半割

土器・土製品（約 S=1/3）

紡錘車（S=1/2）

石鏃（原寸大）

須恵器杯蓋 A（S=1/2）

石器（S=1/2）

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし ほんごうたかだいせき・やなぎだいせきだい3じ はっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市　本郷高田遺跡・柳田遺跡第３次　発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№252
編著者名	直井雅尚、原田健司
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620　長野県松本市丸の内３番７号　TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市考古博物館　〒390-0823　松本市大字中山3738-1　TEL0263-86-4710)
発行年月日	2024(令和6)年９月30日　(令和６年度)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほんごうたかだ 本郷高田	ながのけん まつもとし 長野県 松本市 あさまおんせん 浅間温泉 にちょうめ 二丁目9-2	20202	66	36度 15分 45秒	137度 59分 10秒	19940516 (H6.5.16) ～ 19940613 (H6.6.13)	889.2 ㎡	のばら保育園 建設事業
やなぎだ 柳田	ながのけん まつもとし 長野県 松本市 あさまおんせん 浅間温泉 いっちょうめ 一丁目214-1	20202	69	36度 15分 32秒	137度 59分 06秒	19980604 (H10.6.4) ～ 19981009 (H10.10.9)	209.86 ㎡	消防団詰所 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本郷高田	集落跡	縄文	竪穴状遺構　1基 土坑　9基 ロームマウンド　1基	縄文土器 石鏃、石錐、打製石斧 凹石、磨石	・縄文時代前期の土器・石器が出土した。
		古墳	竪穴建物　3棟 (第1～3号住) 掘立柱建物　1棟 土坑　19基 ピット　19基	土師器、須恵器、土製品（須恵質の紡錘車）	・古墳時代末の大形掘立柱建物が発見された。須恵器の器台が出土した。
		中世？		銭貨片（開元通宝？）	
柳田	集落跡	奈良 平安	掘立柱建物　1棟	土師器、須恵器	・奈良時代後期～平安時代前期と推定される大形掘立柱建物が発見された。

要約	・本郷高田遺跡と柳田遺跡第3次の発掘調査で、いずれも市の建設事業に伴う緊急発掘として実施した。本郷高田遺跡では縄文時代と古墳時代の遺構と遺物が発見され、古墳時代末期の7世紀後半に属すると推定される大形の掘立柱建物1棟が伴っていた。柳田遺跡では奈良・平安時代の遺構と遺物が発見され、奈良時代後期から平安時代前期に属すると推定される大形の掘立柱建物の存在が確認された。いずれの掘立柱建物もきわめて規模が大きく、官衙など公的な機関や施設に付随する遺構の可能性がある。

松本市文化財調査報告№252

長野県松本市

本郷高田遺跡・柳田遺跡3

－発掘調査報告書－

発行日　令和6年9月30日

発　行　松本市教育委員会

〒390-8620　松本市丸の内３番７号

印　刷　電算印刷株式会社